コメント②

『名古屋大学五十年史』からの展望

吉川卓治

はじめに
一　『五十年史』の成り立ち
二　『五十年史』は何かを書いたか
三　『百年史』を展望する
まとめ

はじめに

私は一九九〇年に大学院を中退し、大学史編集室の助手として勤務するようになり、そこから四年間、『名古屋大学五十年史』の編纂に関わりました。そういう経験を踏まえて、『五十年史』の成り立ち、何を書いたか、『五十年史』から『百年史』にどう展望していくかということをお話しさせていただきます。

具体的には、『五十年史』が何を書き、何を見据えていたのかということを今の時点で振り返り、そのことを時代状況に位置づけて、結局、大学史はどういう意味を持つのか、その可能性を展望したいと考えています。

一　『五十年史』の成り立ち

『名古屋大学五十年史』には前史があります。一九七五年に、当時の芦田学長が大学史を作ろうと提案されたことです。ところがそれはうまくいかず、五年間たって休止になってしまいました。

それが、一九八三年六月に再始動します。きっかけは教育学部で、当時、教育行政学の専門家で、日本の占領期の教育改革研究をなさっていた鈴木英一先生が自分で試案を作られ、教授会で同意を得たということだったようです。その同意を受けて、西洋教育史の専門家である、当時の江藤恭二学部長と鈴木先生、それからドイツの大学史、教育社会学の潮木守一先生と三人で、当時の飯島宗一学長に直談判に行き、即座に了承を得たと言われています。

ただし、江藤先生は二人で、鈴木先生は三人で行ったと書かれていて、どちらが正しいのか分かりません。

鈴木先生の試案のポイントは二つあります。一つは、他の大学はもう大学史を作っているので、名古屋大学も作らなければいけないのではないかということでした。もう一つは、通史と部局史の二巻構成にして五年間で出すというものでした。それを基にして、学部長会に教育学部長が企画試案を提案し、了承され、さらに五十周年記念事業の一環として位置づけられました。これは大きな意味を持っています。当時五十周年の記念事業のために集められたお金が十数億円で、そのうちの一億円を大学史の編纂事業に充てることになったのです。

そして、一九八五年一月、評議会の議を経て編集委員会が発足します。これは全学の委員会として全学の各部局から委員が集まり、会議はいつも評議会が行われる部屋で行われました。非常に緊張する会議だったという記憶があります。

その四月に大学史編集室が実務を担当する機関として、助手一名で発足します。そして、一一月に編集委員会で刊行計画・編集方針を承認し、その後、通史に向けての執筆担当者の委員会が立ち上がりました。

初代の編集委員長は、提案した江藤先生です。最初の助手は、今、愛知学院大学の井上知則先生です。江藤先生の後、医学部の加藤延夫先生が編集委員長になり、その後、当時の早川学長が病気で亡くなり、加藤先生が学長になられたので、委員長を交代しています。

『名古屋大学五十年史』がとても恵まれたのは、私が入ったときに助手二名のポストを増やし、全部で、三人でやることになったことです。これは当時の加藤編集委員長が早川学長にポストを増やしてほしいと掛け合い、了承されたからです。一九九二年にはもう一つポストを増やし、最盛期には四人体制でやりました。

刊行計画については、鈴木試案を基に、それをさらに発展させる形で写真集を一九八八年、部局史を一九八八年、

年表・資料集を一九八九年に出し、通史は一九九〇年に刊行という計画で進むことになりました。ところが、実際にはうまくいかず、最初に作られたのは一九八九年一〇月に出た部局史でした。なぜ一九八九年だったかというと、この年が名古屋大学の五〇周年で、これより遅れることは絶対に許されないからでした。ただ、内容が増えてしまったので、部局史は二巻にするという変更を行いました。

続いて、写真集が二年後に出されることになりました。このときは年表・資料集は、写真集が出たからやめるというような感じで、作ることを諦めてしまいました。

通史の刊行は一九九五年で、予定より五年も遅れることになりました。この年に出さないと四捨五入して六十年史になってしまうという心配があり、何とか頑張って一九九五年に出したわけです。

その他の変更としては、紀要を刊行するようになりました。もう一つ重要なのは、「稿本」を刊行したことです。「稿本」というのは、『東京大学百年史』だと試験印刷稿とかタイプ稿とかいうものに当たるものです。裏話を申し上げると、当初はこれの予定はありませんでした。ところが、早くから出してくださった先生の原稿の中には、通史としては使いにくい状況のものがあり、何とか棚上げする手はないかと考えていたとき、今の大学史協議会の前身である関東地区大学史連絡協議会に行き、当時立教大学にいた中野さんに話したところ、東京大学ではこのようにやっているという話を聞いて、なるほどと思い、名古屋大学に帰ってきて話をしたら、それでいきましょうということになったのです。刊行本を出すときには、お金があったことも幸いし、問題の原稿は「稿本」に入れて、それをさらに編集室で作り直して「通史」に仕上げました。鈴木試案では一巻だったのですが、これも結局、二巻本になりました。

全部のラインナップはこのような感じで、「写真集」「部局史」と「通史」があり、「部局史」の背文字は飯島先

生が書かれました。「通史」の方は加藤先生が書かれました。そして「稿本」「紀要」です。刊行の編集方針は、将来の全学的展望の下に書くことと、名古屋大学が果たした役割と国家政策との関わり、地域との関わりで書くということです。

二　『五十年史』は何かを書いたか

寺﨑先生や西山先生が関わっている学校沿革史研究会が『学校沿革史の研究』という本を出していらっしゃいます。その中で『名古屋大学五十年史』についてコメントを頂いています。

戦後編のところは、特に名古屋大学の前身校を書いていて、これは東京大学ではやっていない、戦後改革期の学生の実態をきちんと書いている。当時の政治的な政策動向・政治的圧力と大学との関係をきちんと書いている。利用が可能になったＧＨＱ／ＳＣＡＰ文書を使っている。以上のことをご指摘いただいています。これは本当にありがたいことだと思いながら、読ませていただきました。けれども、政府関係審議会、大学基準協会、高等教育改革総体への関心が薄いという厳しいご指摘も頂いていており、本当にそのとおりだと思いました。

実際に『東京大学百年史』と『名古屋大学五十年史』を並べて比べてみると、その辺がよく分かります。例えば大学の自治ということに関して、つまり政治的なものとの関係は、名古屋大学の場合は二つ入れています。それから、これは指摘にはなかったのですが、伊勢湾台風に関しての地域的な動向を入れています。また、学生の動向に関わるところで、重要な入試に関しては、二カ所に分けて入れています。

東京大学にあり、名古屋大学で弱いのは、大学院と学位制度についてです。東京大学は二カ所で書いていますが、名古屋大学は一カ所、設置のところしか書いていません。それからもう一つの大きな弱点は、国際交流です。国際交流は、東京大学は章にもなって作られていますが、名古屋大学はそれが章レベル、節レベルで出てきません。

まとめると、『五十年史』はどこに関心があったかというと、今振り返ってみても大学自治のところが一番大きかったと思っています。大学管理法やレッド・パージの問題を入れています。その延長で、教室運営の民主化をうたった理学部の「物理学教室憲章」のことを項レベルで書いています。それから、刊行の数年前に、名古屋大学の構成員の半分以上の賛成で採択された「平和憲章」をぜひ入れたいというのが、当時実務に関わっていた私たちの願いでしたので、これを入れました。関心の二つ目としては、伊勢湾台風を入れています。これは地域との関わりから、絶対に入れたいということです。それから、入試制度です。これは共通一次試験が大学入試センター試験に大きく変わるときでもあり、それを背景にしていたことが大きいと思います。

一方で、大学院制度についての関心が薄かったことは認めざるを得ません。ただ、それは当時の状況を考えるとやむを得ないところもありました。部局史や編纂方針が作られたころは、まだ教職員の数よりも、大学院生の数が少ない時代だったからです。

そのことをもう少し別のデータで見ると、一九九〇年あたりは、修士課程の大学院生が増え始める、ちょうど前の時期なのです。

それから、いろいろ調べて面白かったのは、学位授与者数です。五十周年のあたりは一九八九年で、博士学位の授与者のうち論文博士の数が、課程博士の数よりも多い時代でした。つまり、今の大学院の大きな改革の中で、課程博士を中心に進んでいく状況になる「前夜」の時期でした。そういうこともあり、恐らく大学院についての記述

の弱さが出たのではないかと思います。『京都大学百年史』も、平成四年ぐらいから課程博士が増え始めたということが書いてあります。全国的にそういう流れがあり、ちょうど一つの時代から移り変わる時期に『五十年史』が書かれ、その特徴が表れていると思いました。

国際交流への関心の薄さは言い訳のしようがないと思っています。右肩上がりで留学生の数が増えていく時期ですから、何らかの工夫があってよかったと思ったりもしています。

通史の最後に展望を書くページがあります。そこには三つのことが書いてあります。一つは、四年一貫教育が今後、本格的に実施されるということ。それから、大学院の重点化が始まるということ。そして、キャンパスの再開発計画、とくに鶴舞の附属病院の再建などが書いてあります。『東京大学百年史』はこの部分に一〇二ページ使っていますが、『名古屋大学五十年史』は十数ページで、とても少なかった。これは時間がなかったことが原因だろうと思っています。

三　『百年史』を展望する

最後に、今後『百年史』編纂に向けてどういうことを書いていく必要があるのか、そのことを書くことによって、どういう良いことがあるのかをまとめたいと思います。

一つは、これまで大学沿革史は組織改編の動向を書いてきました。それを今後もきちんと書いていくのが重要だろうと思っています。特に大学の法人化以降、学内コンソーシアムという形の組織が非常にたくさんでき、全体像

がかなり大きく複雑な形になっています。その中で、正確な自画像をつくることが求められているような気がします。

例えば『五十年史』のときの名古屋大学の部局の組織は、こんな感じでした（スライド一七枚目）。この辺に学部があり、これが大学院で、附置研究所が三つあり、あとは施設という感じです。

これに対応して、部局史も二巻構成で、全二六章構成で作ることができました。

これは現在の名古屋大学の組織です（後掲資料）。事務組織を入れていることもありますが、基本的な組織だけでもこれだけあるので、これをいかにしてまとめていくかが重要だと思います。それをまとめていくことによって、今日の大学政策への場当たり的な対応を回避して、内からの改革の基盤にすることができるのではないかということです。

一方で、先ほどの図を見ていくと、これで部局史がきちんとできるのだろうかと不安になってきます。というのは、『五十年史』のときの部局史は、それぞれの部局に担当者を置いて執筆していただきました。しかし、今の学内の組織は非常にバーチャルな組織も入っていますので、そういったところをどのように書くかという問題もあると思います。しかし、部局史をきちんと書かないことには、先ほどの寺崎先生の話にもありましたが、学術的な面からの評価は相当に難しくなります。だから、部局史は何とか成立させなければいけないのではないかと思っています。

それは研究活動との関わりがあって、大学院の仕組み、実態を示すのもそうなのですが、学内のさまざまな研究組織を書くことにも関わってきます。特に名古屋大学の場合はノーベル賞の受賞があり、なぜ名古屋大学は多いのだというので、朝日新聞にも記事が出ました。「伝統の積み重ね」というのは、一つには、物理学教室の「物理学教室憲章」がかなり大きな意味を持っていたと考えられ、『五十年史』でしっかり書いておいて本当によかったと思っ

ています。実は「稿本」の段階では入っておらず、後から入れた感じになっています。通史には、それをきちんと位置付けることができているので、それを見て研究室の民主的な運営がこういう研究の土台であることが、きちんと説明できるようになっており、非常に良かったと思っています。

それから、学生については、単に量的に増えただけではなく、留学生の問題や社会人院生や学生の問題等々、非常に多様な人が入るようになってきていますから、それをきちんと書く。それが大学のカリキュラム改革の基盤になると思います。また、記述の質的な深化も必要でしょう。

それから、国際交流についても、宿題となっていますから、きちんと書かなければいけない。

地域関係は、後で福岡先生の話にも出てくると思いますが、自治体史との関わりがあると思います。京都大学のようにずっと動かずに、そのキャンパスがずっと使われてきたところは、百年史を見ると、キャンパスの移り変わりがしっかり書かれていたりしますが、そういうことと周辺のまちと大学がどう関わってきたのかも書けるといいのではないか。

それから、頻発する災害に対する関心が最近は高まっています。『五十年史』も濃尾大地震と伊勢湾台風が書いてありますが、その他の問題についてもどのように対応したのかを書くことによって、自治体史を通しての地域貢献が可能になるのではないかと考えています。

まとめ

簡単にまとめると、『五十年史』は急激に変化が始まる時点で生まれたものでした。そういう大学沿革史を作っていくことによって、外からの改革ではなく、中から改革を進めていくための手がかりになるし、地域社会を含む社会への貢献につながっていくのではないか。

今後の課題として、それをどのようにしてやっていけばいいのかということを、他大学の大学史編纂にかかわる方々等とさまざまな情報の交換や共有をしていく必要があるだろう。これは現になされていると思うのですが、今後さらに必要があるだろう。

それから、新たなフォーマットです。大学史というと、通史、部局史、写真集、資料集、紀要の五点セットが基本的な形だと思うのですが、そこに例えば先ほど出てきたようなブックレットのような形を入れていく。そういう形式的な問題と、バーチャルな組織についてどのような扱いをしていくかというような一つのフォーマット、モデルのようなものが今後検討されなければいけないのではないかということです。特に名古屋大学の場合、写真集を出したときに、資料集をやめてしまったのですが、その宿題をきちんと今後もやっていかなければいけないと思います。

（よしかわ・たくじ　大学院教育発達科学研究科）

第2回名古屋大学　大学文書資料室シンポジウム　2014.11.28
「今、なぜ大学史か―その意義と展望」

『名古屋大学五十年史』からの展望

名古屋大学教育発達科学研究科
吉　川　卓　治

はじめに

『名古屋大学五十年史』
（通史2巻、部局史2巻、写真集…）
が

- 何を書き、何を見据えていたのか、振り返り、
- 時代状況に位置づけることを通して、
- 大学（沿革）史はどのような意義を持ちうるか、
- 可能性を展望する。

１『五十年史』の成り立ち

（１）前史

- 1975年4月 学部長会で芦田学長提案
- 同年7月 評議会で名古屋大学歴史編さん準備委員会発足を決定
- 1976年10月 評議会で名古屋大学歴史編さん委員会設置を決定
- 1980年4月 休止

１『五十年史』の成り立ち

（２）再始動

- 1983年6月 教育学部で「鈴木試案」了承
- 同年8月 江藤学部長、鈴木、潮木両教授が飯島学長に提案し了承を得る。
- 同年9月 学部長会に教育学部長が「『名古屋大学五十年史』企画試案」を提案
- 同年10月 編纂事業が学部長会で五十周年記念事業の一環の位置づけとなる。

1『五十年史』の成り立ち

（3）編纂事業の開始

- 1985年1月 評議会で名古屋大学史編集委員会規程承認→名古屋大学史編集委員会発足
- 同年4月 名古屋大学史編集室を設置
- 同年11月 編集委員会で刊行計画・編集方針を承認
- 1987年4月 通史に向け全学委員会として名古屋大学史執筆担当者会議を設置

1『五十年史』の成り立ち

（4）刊行計画

- 写真集　1988年3月
- 部局史　1988年12月
- 年表・資料集1989年6月
- 通史　1990年3月

実際には…

- →1991年12月
- →1989年10月　1→2
- →写真集に包摂
- →1995年3月　1→2
  - 稿本の刊行
  - 紀要の刊行

名古屋大学五十年史刊行略年表（1983～1996年度）

年度	事項	学長	編集委員長	編集室			
1983	学部長会で「『名古屋大学五十年史』企画試案」審議	飯島宗一					
1984	評議会で「名古屋大学史編集委員会規程」承認						
1985	名古屋大学史編集委員会/名古屋大学史編集室設置		江藤恭二	井上			
1986							
1987	名古屋大学史執筆担当者会議設置	早川幸男					
1988	常任編集委員会設置						
1989	部局史1・2刊行／創立50周年記念式典						
1990			加藤延夫	勝山	片岡	吉川	
1991	写真集刊行						
1992		加藤延夫	篠田弘	高木			田中
1993	『稿本名古屋大学五十年史』全11巻刊行開始（～96年）						
1994					山口	中村	
1995	通史編1・2刊行						
1996	編集室を名古屋大学史資料室に改組						

備考）『名古屋大学五十年史』通史2などにより作成。

1 『五十年史』の成り立ち

（5）編集方針

1. 名古屋大学の全学を対象とする歴史編纂は今回が最初である。すでに刊行されている部局史（誌）等を参照としたうえで、さらに資料の調査収集を徹底し、<u>将来に向けて全学的展望のもとに</u>歴史を記述する。
2. 前史および帝国大学期、さらに新制大学期を通じて、名古屋大学が人材の育成および学術の発達において果たした<u>役割</u>について、一つは<u>国家政策との関わり</u>から、他方、<u>地域</u>（東海地方さらには中部地方）の本学に対する要求・期待との関わりから叙述する。
3. 名古屋大学の歴史をその前史を含めて総合的・体系的に叙述し、大学史・教育史および地方史としても一級の水準のものとする。

２『五十年史』は何を書いたか

（1）『学校沿革史の研究』（2013年）の指摘

- 前身校
- 戦後改革期の教職員・学生の実態、組織的新動向
- 政策動向・政治的圧力と大学との関係
- GHQ/SCAP文書の引照
- 政府関係審議会、大学基準協会、高等教育改革総体への関心の薄さ

『名古屋大学五十年史』通史二（1995年）970頁
第3編
第1章　新制名古屋大学の成立
第1節　新制大学への移行と旧制文学部・法経学部の創設
第2節　大学管理法案と大学自治
第3節　新制名古屋大学の発足
第4節　新制大学院の設置
第5節　新制名古屋大学の組織と機構
第6節　新制の入学試験制度と学生生活
第7節　レッド・パージ問題への対応
第2章　名古屋大学の整備・拡充
第1節　新制大学整備・拡充の動向
第2節　名古屋大学整備計画
第3節　部局分散時代の整備
第4節　東山地区への移転
第5節　東山移転後の整備・拡充
第6節　学生生活
第7節　伊勢湾台風をめぐる動向
第8節　日米安全保障条約改定反対運動
第9節　大学紛争
第3章　名古屋大学の改革・再編
第1節　改革に向けての全学的取り組み
第2節　各部局の改革
第3節　組織再編と施設整備
第4節　学生生活の変化
第5節　入学試験制度改革への取り組み
第4章　創立五十周年の名古屋大学
第1節　名古屋大学の組織・機構
第2節　名古屋大学創立五十周年記念事業
第3節　改革動向

『東京大学百年史』通史三（1986年）1076頁
第7編
第1章　新大学制度への移行
第1節　教育改革動向と東京大学　／　第2節　新制東京大学の発足 第3節　人事・財政等の制度改革　／　第4節　学部通則等の改正
第2章　新制東京大学大学院と学位制度
第1節　新制東京大学大学院　／　第2節　学位制度の制定
第3章　学部・研究所の整備と東京大学の対外的役割
第1節　学部学科・研究所の創設・改編
第2節　日本学術会議・国立大学協会と東京大学　／　第3節　国際交流
第4章　政治・社会と東京大学
第1節　政治と東京大学
第2節　学生生活と厚生施策
第3節　学生運動と大学の対応
第8編
第1章　東京大学と管理運営制度の改革
第1節　大学制度審議会と管理運営制度の改革
第2節　大学の管理運営問題　／　第3節　東京大学の財政と施設
第2章　東京大学の拡充
第1節　学部・研究所等の新設　／　第2節　学部学科の改組拡充
第3節　研究所・附属図書館の改組拡充
第3章　東京大学大学院の改編と拡充
第1節　大学院の改編と拡充
第4章　国際交流
第1節　学術交流　／　第2節　学生の交流
第5章　学生生活と大学紛争
第1節　学生生活　／　第2節　学生運動と東京大学の対応
第6章　東京大学の改革動向
第1節　大学改革に関する諸組織の設置と活動
第2節　教育制度改革とキャンパス問題
第3節　創立記念事業
第7章　東京大学の概況

２『五十年史』は何を書いたか

（２）関心の中心と周縁

①大学自治への関心

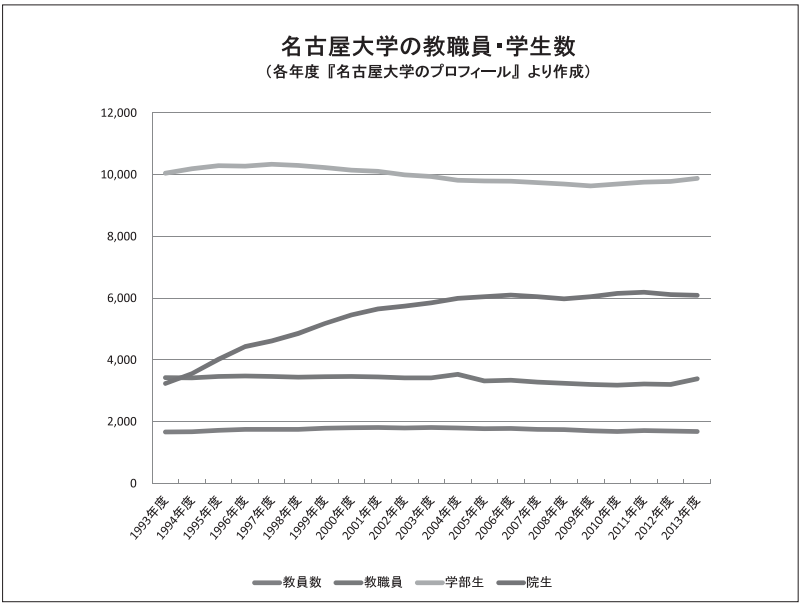
大学管理法／レッド・パージ／「物理学教室憲章」／「平和憲章」

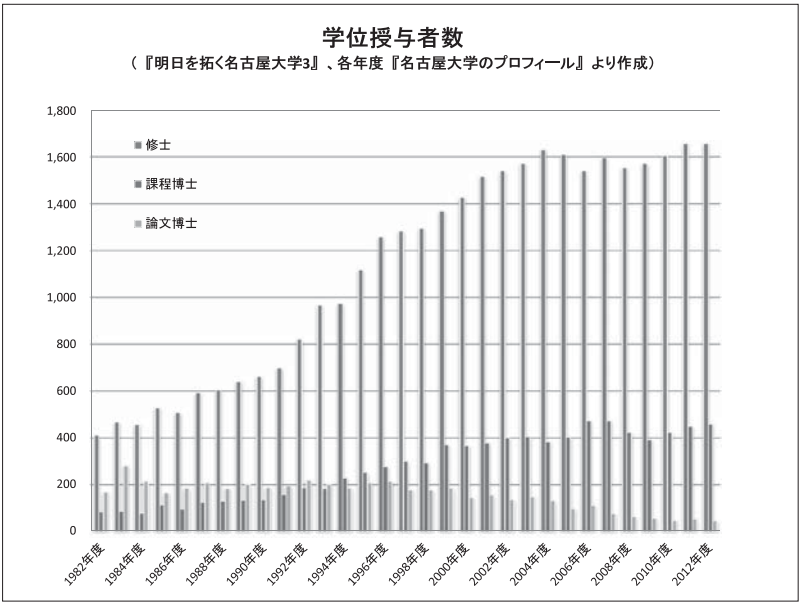
②伊勢湾台風

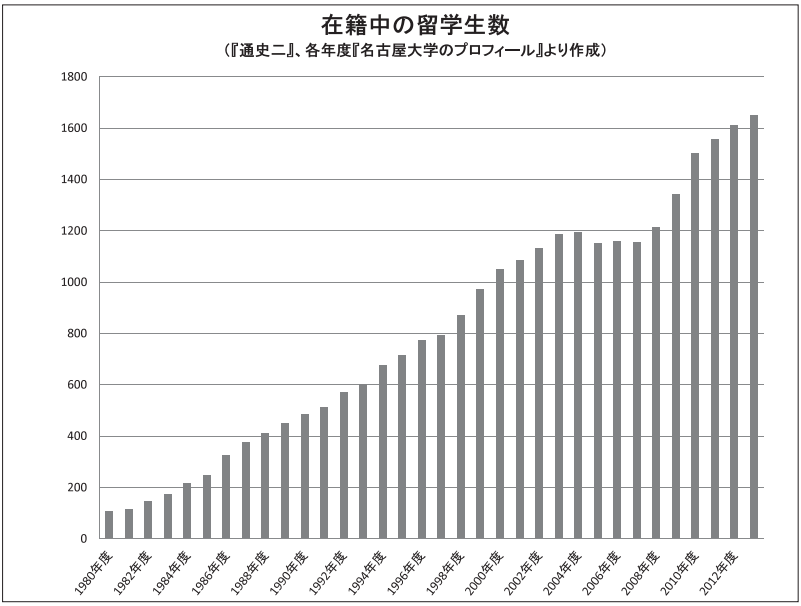
③入学試験制度

④大学院への関心の薄さ

⑤国際交流への関心の薄さ




学位授与者数
（『明日を拓く名古屋大学3』、各年度『名古屋大学のプロフィール』より作成）
1,800
1,600
1,400
1,200
1,000
800
600
400
200
0
修士
課程博士
論文博士
1982年度
1984年度
1986年度
1988年度
1990年度
1992年度
1994年度
1996年度
1998年度
2000年度
2002年度
2004年度
2006年度
2008年度
2010年度
2012年度


在籍中の留学生数
（『通史二』、各年度『名古屋大学のプロフィール』より作成）
1800
1600
1400
1200
1000
800
600
400
200
0
1980年度
1982年度
1984年度
1986年度
1988年度
1990年度
1992年度
1994年度
1996年度
1998年度
2000年度
2002年度
2004年度
2006年度
2008年度
2010年度
2012年度

２『五十年史』は何を書いたか

（３）見据えたもの―通史編2「改革動向」―

①四年一貫教育の本格的実施

- 1994年度実施←大綱化（1991年）

②大学院重点化

- 2000年度実施←大学審議会答申（1991年）

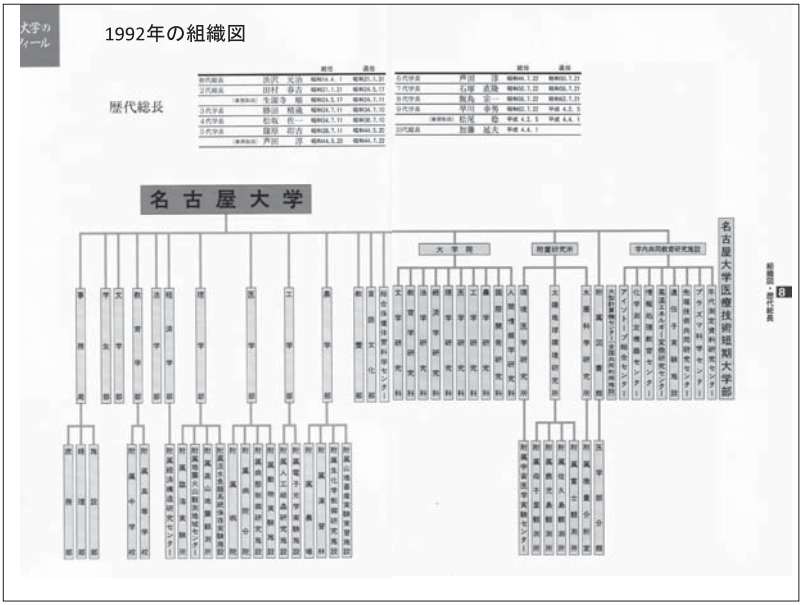
③キャンパス再開発計画

⇒しかし『東大百年史』（記述102頁）に比べ弱い

３『百年史』を展望する

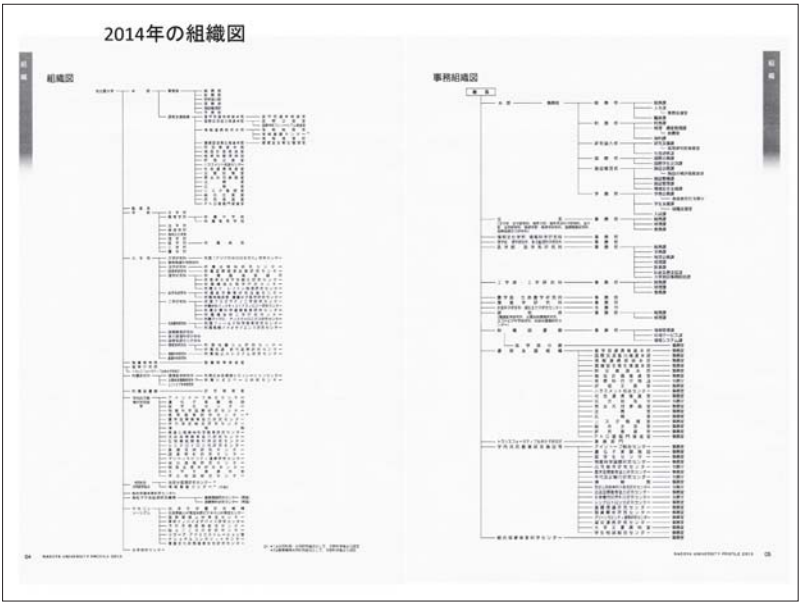
（１）組織改編の動向

- 法人化（2004年）以降重要性増大
  ex.「ミッションの再定義」への対応
- 学内コンソーシアムを含む全体的把握
  →正確な「自画像」
- 大学政策への場当たり的対応を回避
- 『部局史』の不成立？



部局史一・二目次			
①	第1章　本部事務局	⑭	第14章　水圏科学研究所
②	第2章　学生部	⑮	第15章　プラズマ研究所
③	第3章　文学部	⑯	第16章　附属図書館
④	第4章　教育学部	⑰	第17章　アイソトープ総合センター
⑤	第5章　法学部	⑱	第18章　化学測定機器センター
⑥	第6章　経済学部	⑲	第19章　情報処理教育センター
⑦	第7章　理学部	⑳	第20章　省資源エネルギー研究センター
⑧	第8章　医学部	㉑	第21章　遺伝子実験施設
⑨	第9章　工学部	㉒	第22章　先端技術共同研究センター
⑩	第10章　農学部	㉓	第23章　大型計算機センター
⑪	第11章　教養部	㉔	第24章　総合保健体育科学センター
⑫	第12章　環境医学研究所	㉕	第25章　総合言語センター
⑬	第13章　空電研究所	㉖	第26章　医療技術短期大学部

①～⑯、㉔～㉖　編集委員会に委員が出席。
③～⑯、㉔㉕評議会に代表が出席。㉖オブザーバーとして出席。

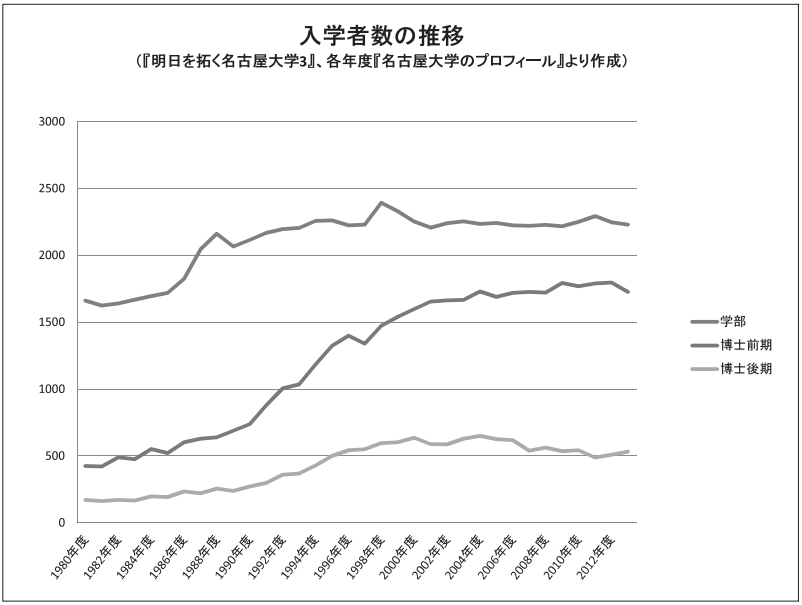


３『百年史』を展望する

（2）研究活動
- 大学院の仕組み・実態
- ノーベル賞受賞の説明

（3）学生
- 増加と多様化
- 記述の質的深化も

→教育改革の基礎資料



３『百年史』を展望する

（４）国際交流

（５）地域関係

- 自治体史とのかかわり
- 街並みと大学
- 頻発する災害への対応

→地域貢献

まとめ

（1）変化の始まりの時点で生まれた『五十年史』

（2）意義

①「外からの改革」から「内からの改革」へ

②社会への貢献

（3）課題

- 情報の交換・共有
- 新たな「フォーマット」
- 資料編の継続的整備

主要参考文献

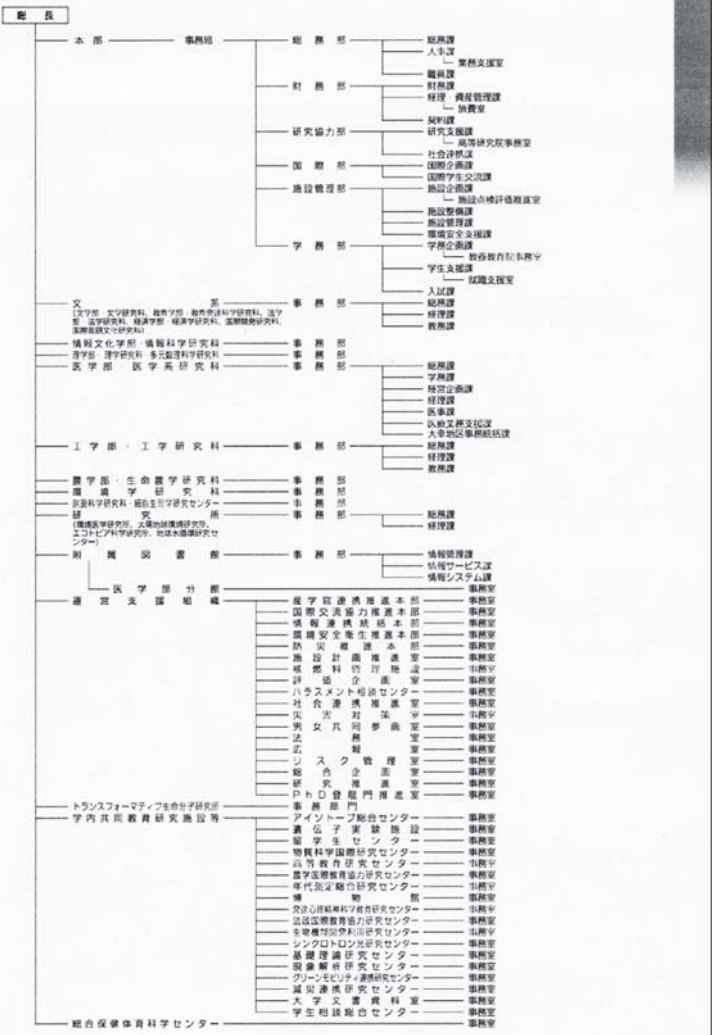
- 学校沿革史研究会『学校沿革史の研究　総説』野間教育研究所紀要第47集、2008年
- 同、第53集、2013年
- 江藤恭二「『名古屋大学五十年史』編纂発足の頃」『名古屋大学史紀要』第4号、1996年
- 鈴木英一「大学史編纂を振り返り、将来に期待する」『名古屋大学史紀要』第4号、1996年
- 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』総説編、2008年
- 中野実『大学史編纂と大学アーカイヴズ』野間教育研究所紀要第45集、2003年
- 寺﨑昌男・別府昭郎・中野実編『大学史をつくる』東信堂、1999年

2014年の組織図

組織図

注）●は共同利用・共同研究拠点として、文部科学省より認定
▲は教育関係共同利用拠点として、文部科学省より認定

事務組織図


総長
本部
事務局
総務部
総務課
人事課
業務支援室
職員課
財務部
財務課
経理・資産管理課
旅費室
契約課
研究協力部
研究支援課
高等研究院事務室
社会連携課
国際部
国際企画課
国際学生交流課
施設管理部
施設企画課
施設点検評価推進室
施設整備課
施設管理課
環境安全支援課
学務部
学務企画課
教養教育院事務室
学生支援課
就職支援室
入試課
文系事務部
総務課
経理課
教務課
情報文化学部・情報科学研究科
理学部・理学研究科・多元数理科学研究科
医学部・医学系研究科
工学部・工学研究科
農学部・生命農学研究科
環境学研究科
創薬科学研究科・細胞生物学研究センター
研究所
附属図書館
医学部分館
運営支援組織
トランスフォーマティブ生命分子研究所
学内共同教育研究施設等
総合保健体育科学センター